



УБЕРЕЧЬ КАЖДОГО ИЗ ОСТАВШИХСЯ アムールヒョウ — 14の命



WWF Россия Амурская
692003, г. Владивосток, ул. Верхнепортовая, д. 18/а
тел. (4232) 41-48-68, факс (4232) 41-48-63
E-mail: office@wwfrfe.ru
www.wwf.ru



野生動物保護協会 (WCS)
Россия, 690090, Владивосток, ул. Алеутская, 17а - 31
Тел./ факс: (4232) 41-49-06, 41-00-33
E-mail: tatperov@vlad.ru



天然資源持続的利用研究所 (ISUNR)
Россия, 690023, Владивосток, ул. Овчинникова, 20 - 33
Тел./ факс: (4232) 33-15-56
E-mail: iup-vladivostok@mail.ru



Феникс-Фонд
Россия, 690091, г. Владивосток, ул. Петра Великого, 2, каб. 409.
Тел.: (4232) 20-50-53, 20-50-45. Факс: (4232) 205048
E-mail: phoenix@mail.primorye.ru http://www.phoenix.vl.ru



野生自然保護センター「ゾブ・タイギ (森の声)」
Россия, 690041, г. Владивосток, ул. Радио, 7
Тел.: (4232) 32-06-66
E-mail: editor@zovtaigi.ru http://www.zovtaigi.ru

ЗВОНИТЕ!

При обнаружении лесного пожара:

8-42331-54448, 8-42331-54447 –
Барабашский лесхоз.
8-42331-41475 – ГО и ЧС Хасанского р-на,
круглосуточный дежурный.

При обнаружении случаев браконьерства

8-914-71-39-092

Россельхознадзор по Приморскому краю.

При встречах с леопардами

(особенно при встречах самок с котятами)
+79089923457 – Визит-центр
«Земля леопарда».

При нападении леопарда

на домашних животных
(4232) 20-50-53, 20-50-45
Фонд «Феникс».

Автор текста
Василий Солкин

Редактор
Юрий Дарман, к.б.н.

Научный консультант
Алексей Костыря, к.б.н.

Подготовлено к печати в Центре
защиты дикой природы «Зов тайги»
Корректор **Алла Малышева**
Дизайнер **Лариса Кабалик**

Фото: **WCS, ISUNR, WWF,**
«Зов тайги», Игоря Крюкова,
Дмитрия Пикунова

Изд. лиц. ИД № 05497 от 01.08.2001 г.
Гарнитура «Гельветика». Формат 60x84/8
Тираж 2500 экз.

Отпечатано в типографии ФГУП
Издательство «Дальнаука» ДВО РАН
(690041, Владивосток, ул. Радио, 7)

© WWF, 2007
© WCS, 2007
© ISUNR, 2007
© «Зов тайги», 2007

Все права защищены
Издание распространяется бесплатно

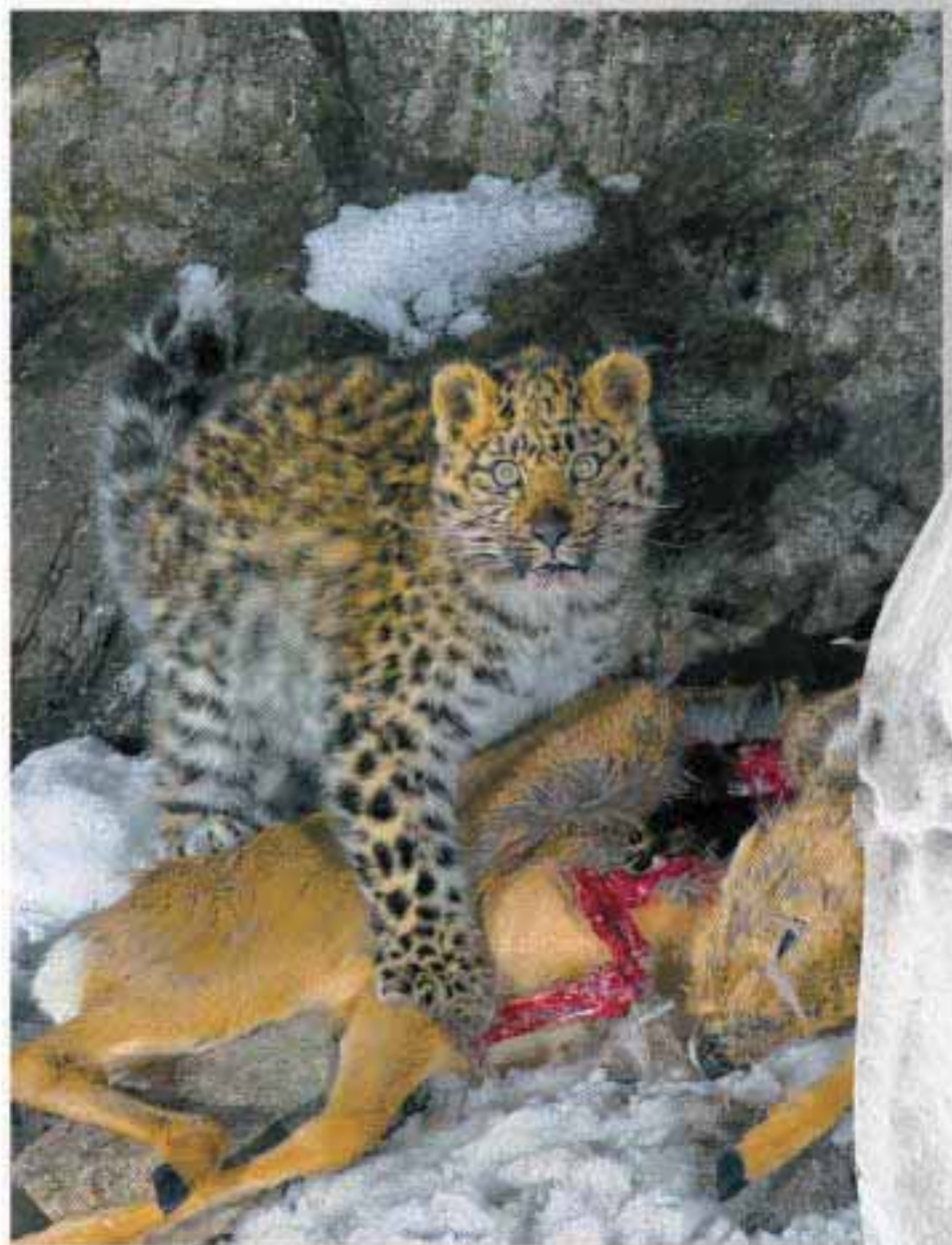


このヒョウの仔は、ケドロバヤ・パジ国立野生生物保護区で2006年3月、単独で行動しているところを発見されました。空腹で、孤独の不安におびえているようです。イゴール・クリコヴは幸運にも、オスヒョウの食べ残したノロジカを食べる子どもを、カメラで捉えることに成功しました。顔も確認できます。

わたしたちは、この子どもが保護区に留まってくれればと期待しましたが、オスの成獣が溪谷に現れると子どもは姿を消し、二度と戻って来ませんでした。

母親に何が起こったのか、わたしたちが知ることは永遠にないでしょう。同様に、子どもの未来も予見することは、できません。

このことは、大変辛い教訓をわたしたちに突きつけます。アムールヒョウの頭数を増やすためにわたしたちは、可能なことは何でもやろうと思い、ロシア以外の国々の組織や一般の人も、ヒョウ保護に協力しています。しかし、この孤独なヒョウの子を救うには、間に合いませんでした。



УБЕРЕЧЬ КАЖДОГО ИЗ ОСТАВШИХСЯ



- 20世紀はじめのアムールヒョウの生息域
- 現在の生息域

はるか昔、人間が地球上に現れる前、一握りのヒョウたちが新天地を求め、豊かなアフリカの大地を旅立ちました。とりわけ勇敢な何頭かは遠く北方の森、ロシア極東地域に連なるシホテアリニ山脈まで到達し、過酷な自然に立ち向かいます。密集した体毛と太い尻尾、灰色の瞳をもつヒョウたちは深い雪の中で狩り、こどもを育て、生き残る道を切り開いていきました。

ところが、ヒョウが征服した地に人間がやって来ます。ほどなく人間は、この地の自然を支配しようとしはじめます。それにはヒョウとの対決も含まれていました。たくさんのヒョウが犠牲になり、生き残ったヒョウたちはじりじりと、生息地を南方へと押しやられていきました。100年に及ぶ人間との戦いでヒョウの頭数は減り続け、今ではわずか30頭前後が生き残るのみです。



はじまり



シホテアリニ山脈でヒョウを見ることは、もうできません。北東部のハンカ湖付近からも、姿を消しています。中国の人々は、タイガの森林をとりわけ首尾よく手中に収めたため、そこにもヒョウは生存していません。かつてのすみかに至る道にも木はなく、人々が耕作する地に姿を変えてしまいました。

1972年。ウラジミール・アラミレフとディミトリー・ピコノフそして、ワシリー・バシリニコフはアムールヒョウの行動域全域で、頭数を数えました。この公式な調査は雪の中で実施され、研究者たちは雪上の足跡を細心の注意をもって計測しました。結果、判明した生息数はわずか46。貴重な生物を保護すべき政府担当者の無策が招いた事態でした。

УБЕРЕЧЬ КАЖДОГО ИЗ ОСТАВШИХСЯ



遺伝子学上は一般的に、50を割る個体数では種の存続は難しいといわれます。近親間での繁殖が起こってしまい、その場合後から遺伝子の劣化を回復することはできないからです。ヒョウの存続は、絶望的と思われました。ところがアムールヒョウは、この常識に挑戦し始めます。30年が過ぎ、担当者が交替しました。国際会議が次々と開かれ、年老いた研究者が後継者に席を譲ります。しかしアムールヒョウの生息数調査が実施されるたび結果はいつも同じ、30～40頭でした。50頭にも満たない頭数で絶滅から持ちこたえているとは、不可解なことです。地上から姿を消すことなどヒョウたちの計画にはないと言わんばかりでした。

生息数をもっと正確に推定するため、足跡を数えるのに変わる方法が必要になってきました。そこで検討されはじめたのが、カメラによる自動撮影です。

手法は、比較的単純なものです。ヒョウの身体の斑点模様はそれぞれ異なり、一生を通じて変化しません。指紋から人物を特定できるように、ヒョウもバラのつぼみのような斑点で正確に個体を識別できます。

ヒョウの通過を自動的に察知して撮影するカメラを設置し、繰り返し撮影された枚数を取り除く。それを単純な公式に当てはめれば、その地域に生息するヒョウの頭数が推測できます。

2002年、野生動物保護協会と天然資源持続的利用研究所が共同で、カメラ調査に着手。世界中は今や遅しと結果を待ちました。この新しい現代的な手法で、今までより多くの生息数が確認されることを期待したのです。ところが、最新鋭の機器をもって判明したのはまたしても聞き慣れた数、30～40頭でした。



カメラが設置されて5年が経過しています。行動域の北と中央部で長期的な調査を実施することで、もっと多くの情報を得ることができました。この冊子では、カメラに映った一頭一頭の姿と行動範囲とともに、それぞれのヒョウが今どんな風に暮らしているかをお伝えします。





レオポルド

леопольд



隠しカメラを使った生息域調査で、大きな話題になったのがレオポルドだった。出会いは1994年にまで遡る、我々が最も親近感を覚えるオスのヒョウだ。

無線付きの首輪を付けようと、この逞しいヒョウを1ヶ月間探し続けた時のこと。レオポルドはすぐに我々の策略に気づき、巧みに罠を避けた。やっと罠にかかったもの

の普通ならば1本で十分な麻醉薬を仕込んだ矢を3本も放ち、やっと近づくことができた。体重を測ろうとすると、麻醉でもうろうとしながらも頭を持ち上げ、自分を傷つけた犯人を攻撃しようとする。意識が戻って立てるようになると、我々の後を小屋までついてきた。

首輪を付けた時レオポルドは6歳、人間でいうと壮年期にあたる。無線で集めた情報から推し量れたのは、レオポルドの体力が並外れていることだった。1年半以上、無線はエルドゥギの崖と、グリヤズナヤ川の上流から発信され、その後は中国のどこかに移り、ついに何も受信できなくなった。

ところがそれから9年後に突然、隠しカメラにヒョウが写った。首輪をつけたヒョウが！

レオポルドだ。何年も前に別れたヒョウが、レンズから我々を見つめている。捕獲中に撮影した9年前の写真で、斑点模様を確かめたが、疑う余地はない。目の前にいるのは、健康な様子のレオポルドだった。

15歳といえば、ヒョウにとってはかなりの高齢で、生存できる生息地は保護区のような環境だけだ。野生で生きる動物、それも狩猟地が密集しているような場所の真ん中で、レオポルドがまだ生きているのは奇跡といってもよかった。

年齢を重ねたレオポルドは撮影されるのに慣れ、カメラを避けなくなった。このようにして最後の9年間、レオポルドの狩りの範囲がほとんど変わらず、2003年に無線付き首輪で追跡した時と同じくらい広範囲に渡ることが明らかになった。

しかし、以前のような力強さはレオポルドから消えていた。近隣のオスたちの圧力に抵抗することはもうできない。レオポルドの広大な領土は、紙を丸めるように縮み始めた。2004年、1度だけカメラに写ったのを最後にレオポルドは、我々の前から姿を消した。



УБЕРЕЧЬ КАЖДОГО ИЗ ОСТАВШИХСЯ

Шуфанский



Шуфанский

狩りのなわばりを守りさえすれば、安泰ということにはならない。隠しカメラを設置し始めた時のシュフアンスキーは、自分のなわばりに一部重複してなわばりを持っていた2頭のメス、ティカーヤそしてダルーニャと接触していた。この2頭は、レオポルドのなわばりにも出没していた。

このことは、生き残りをかけてライバルと勝負しメスを獲得しているヒョウの現実を物語っている。

ところが2004年、ティカーヤは密猟者に殺され、2005年にはダルーニャも姿を消す。今では若いオスと戦う準備ができたとしても、争うためのメスがいないため、戦いはほとんどなくなってしまった。



隠しカメラを設置してから4年間で、このヒョウについて多くのことがわかった。はじめて撮影された時点でシュフアンスキーは既に逞しい成獣であり、ライバルのオスを倒してきたことを示す広大ななわばりを持っていた。南側はレオポルドのなわばりに接していた。あらゆる点から考えてこの2頭は、かなり以前、つまり我々が隠しカメラの調査を開始するずっと前から、隣り合うなわばりでうまく折り合いをつけて共存してきたようだった。レオポルドがシュフアンスキーのなわばりに立ち入ることは決してなく、逆もまたなかった。そしてレオポルドの死後も、状況は変わらなかった。シュフアンスキーは今までと同じ場所にマーキングし続けた。シュフアンスキーがレオポルドのかつてのなわばりを侵さなかったことを示しており、それは今でも守られている。

シュフアンスキーは、すぐに撮影されるのに慣れた。横顔と顔全体の写真が何枚も残っている。しかし、残念ながらこれらは、研究者を喜ばせるたぐいの物ではない。なぜかという、研究のためには身体全体が写っている写真が必要だからだ。

シュフアンスキーのなわばりには、チョウセンゴヨウが特に豊富に残る落葉広葉樹林があり、クロモミも一部に生育している。道路はまばらで周囲の村からも遠く、ネジノ、ティキー、テレコヴカなどの村の住民が立ち入ることがたまにあるとしても、なわばりは山脈に守られている。ネジンスキーの狩猟団体が頻繁に狩猟する場所からも離れており、保護区に指定されているのはなわばりの一部だけだが、シュフアンスキーは快適で安全に生活している。

シュフアンスキーが真夜中ではなく、朝の時間や夕暮れ時、広い道を日常的に堂々と散策しているのもそうした理由によるのだろう。

しかし安楽な生活も、永遠に続くわけではなかった。なわばりで初めて発見された時点から考え、シュフアンスキーは10歳を下らない年齢になっている。近くには、2年前にきわめて恵まれたなわばりから老齢のレオポルドを追い出した勇敢で若いオスがすんでおり、シュフアンスキーのなわばりを自由に散策している。その様子は、定点に設置した複数の隠しカメラで、ほぼ同時に撮影されていた。

シュフアンスキーが血気盛んな若いオスの圧力に耐え、自分のなわばりをどうやって守っていくのか、推測することはできない。2頭目のレオポルドになってしまうのかもしれない。カメラがシュフアンスキーをとらえる回数は減り続け、2004年は6回、2005年には4回そして2006年には、たった1回になった。



УБЕРЕЧЬ КАЖДОГО ИЗ ОСТАВШИХСЯ



Нежинский

ネジンスキー

ネジンスキーがカメラの前に現れたのは、今から5年前のこと。2002年に隠しカメラを設置して初めて撮影されたのがネジンスキーだ。当時は野生のヒョウを撮影するのが可能かどうか検証し始めた頃で、外国製の隠しカメラが極寒の気温に耐えられるかどうかをテストし、鍵となるヒョウの足跡を探している段階だった。

早い時期からネジンスキーは、なわばり内の最強のヒョウではなくなっていたし、ネジンスキーの猟友団体のハンターが、弾丸を手に団体で頻繁に訪れる場所をなわばりにしていた。農業や漁業、観光業が営まれ、風変わりな場所を好むドライバーが、オフロード車でやって来る。環境特性の観点からみると、育っている木のほとんどはカシカカバだが、火災後の針広混交の落葉樹も混在している。しかし、次第にネジンスキーは、エルドゥガ上部の崖がちの場所の支配権を巡って争うようになった。この深い森には身を隠せる場所がふんだんにあり、餌の捕獲も容易で、楽に生き残ることができる。

ライバルのポリソフスキーが年々、力を蓄えていった。メスのティカーヤに権利を誇示し、シュファンスキーも意に介さない。ティカーヤやシュファンスキーが写るカメラで必ず撮影されている。残念なことに、この対決の結果どのヒョウが子孫を残したのか知ることはできなかった。

2004年、ティカーヤが死亡。若いメスのエルドゥギンスカヤは、既に老齢となったレオポルドのなわばりに姿を現した。自信に溢れたネジンスキーは、レオポルドのなわばりを侵し、新しいメスたちに権利を主張し始めた。シュファンスキーのなわばりの一部、メスのダルーニャの住む場所にもネジンスキーの姿が認められた。

後の調査で、ネジンスキーにはこれ以上、なわばりを広げる体力のないことがわかった。

2005年、ネジンスキーの恋愛における勝利にも終わりが来た。ダルーニャの行方がわからなくなったのだ。そして2年間彼女のなわばりに住んでいたエルドゥギンスカヤも姿を消してしまった。

自分の土地にいるメスを獲得しようとする時、戦うべき相手は年老いたレオポルドでも、シュファンスキーでもない。ライバルは、若く大胆なポリソフスキーであり、写真から判断する限り、とりわけ強く若いヒョウだ。2002年からの5年でネジンスキーは年を取り、ポリソフスキーに覇権を譲ってしまっていた。



УБЕРЕЧЬ КАЖДОГО ИЗ ОСТАВШИХСЯ

УБЕРЕЧЬ КАЖДОГО ИЗ ОСТАВШИХСЯ



Занаворковский

Занаворковский

我々がЗанаворowskiに初めて会ったのは今から3年前、2004年のことだ。そしてすぐにこのヒョウが、カメラ嫌いということがわかった。

Занаворowskiは当初、アンバ川上流に比較的狭いなわばりを持っていたが、3年間で自分が本当の戦士だと証明してみせた。広大なアンバ川流域の全域を支配しているレオポルドの時代に終止符を打ったのは、直接的にも間接的にも、この攻撃的なオスヒョウだ。というのも、レオポルドの最後の写真はЗанаворowskiのなわばりで撮られているのである。

Занаворowskiの現在のなわばりは、血のつながっているオスヒョウたちの中で最も広いようだ。

かつては手付かずのチョウセンゴヨウの樹林だった場所は、焼けたカシの木とチョゼニヤの谷に取って代わられているが、川の右岸にある崖と絶壁沿いには、人の侵入をはばむような場所がふんだんに用意されている。

さらにアンバ川の側面は、一部ネジンスキー狩猟団体の保有地で、禁猟区あるいは有蹄動物の繁殖地として利用されていた。ここで獲物を捕まえるのは難しくないだろう。

Занаворowskiはしかし、人の近寄らない崖を散策するのに飽き足らず、Занаворowskiの村はずれに顔を出し、自らを危機に追い込む。Занаворowskiは、Занаворowskiの生存を、責任を持って見守ることになった。

しかし、近くにメスのヒョウがいなければ、活力にあふれようと健康で丈夫だろうと、あまり意味のないことだ。Занаворowskiの運命は他のヒョウと違い、遺伝的分布の問題に関係する。野生に残っているヒョウの数が絶望的に少ないのは、遺伝学者の懸念することだが、オスとメスの頭数に差がありすぎることが、今直面している問題だ。メスが極端に少ないのでは、オスがわずかに生き残っても子孫を残すチャンスはほとんどなく、近親交配も起こりやすくなる。

我々は、近隣から母親に追い出された若いメスが近い将来、アンバ川流域になわばりを持つてくれるのを、Занаворowskiと共に心待ちにしている。



УБЕРЕЧЬ КАЖДОГО ИЗ ОСТАВШИХСЯ



Барабашёвский

バラバシェヴスキー

バラバシェヴスキーを一目見れば、充分に獲物を取っていることがわかる。
バラバシェヴスキーはケドロバヤ・パジ国立自然保護区を自由に動き回る。また、ここを1、2週間も留守にしては、バラバシェヴカ川の流域一帯からペシャニー半島にまでマーキングをしに出掛ける。バラバシェヴスキーは、この両地域またはいずれかを、戦って獲得した。6年あるいはそれ以上、このなわばりを守り続けている。



アナトリー・ペロフの目下のお気に入り、アナトリーが「やつ」と呼ぶこのオスヒョウは、ケドロバヤ・パジの写真のモデルであり、その時はトルストイまたはプザンと呼ばれる。ペシャニーのシカ牧場経営者にとっては、まったく迷惑な存在、それがバラバシェヴスキーだ。主な獲物はノロジカとアクシスジカである。このなわばりに以前いた無線首輪付きのウグラティーというオスは、死ぬまで犬の肉を好物にしていたが、バラバシェヴスキーは付近の駅の番犬たちを襲ったことは一度もない。このヒーローは典型的な夜型で、昼間は一切活動しない。昨年冬我々が日没前にバラバシェヴスキーを見かけたのはたったの二度だった。好んで活動するのは、真っ暗闇になる真夜中1時頃から日の出の6時頃の間である。

の間である。ネコ科本来の怠惰さと瞬発力を併せ持ち、ぶらぶら歩いていたかと思うと瞬時に筋肉質な体が跳躍し、崖をよじ登る。強い警戒心と、自由に気楽なオスのふてぶてしさを併せ持つ、それがバラバシェヴスキーの姿だ。まさにヒョウ社会のタフガイなのである。

バラバシェヴスキーは多くの映像にも登場している、有名なヒョウだ。画面に映し出される鋭い眼光は、韓国や日本の視聴者を魅了した。つい最近、英国国营放送BBCの視聴者にも姿を披露している。

この冬は、ケドロバヤ・パジ国立自然保護区で3、4日の間に6度も姿を見せた。色々と重要な仕事があるバラバシェヴスキーが、これほど長く保護区に留まることは普通ない。なわばりのどこから若いオスが入り込む隙が万が一にもないように、広大ななわばり全域に定期的にマーキングしなければならない。その中で生活するメスたちに、注意を払うことも必要だ。メスヒョウは交尾のため、1シーズンたりとも一つ所にとどまっていることはなく、その気になればいつでも相手を探しに行ってしまう。そうするとオスヒョウは、子孫を残すチャンスをほぼ永遠に失ってしまう。

悲しい事実もある。なわばりである保護区内のケドロバヤ川渓谷には、以前からバラバシェヴスキーの子どもとその母親がすんでいたが、2005年の冬母親の姿が消えた。2006年の冬にも、一枚の写真も撮影できなかった。

今やこのタフガイに残されたチャンスは1つ、ライバルのスコレチェンスキーからナルバを勝ち取ることだけだ。それができなければ、寂しい孤独な独り者として、ペシャニー半島からバラバシェヴカ川上流までの広大ななわばりを徘徊し続けることになるだろう。



УБЕРЕЧЬ КАЖДОГО ИЗ ОСТАВШИХСЯ



新たな来訪者

Сталкеры



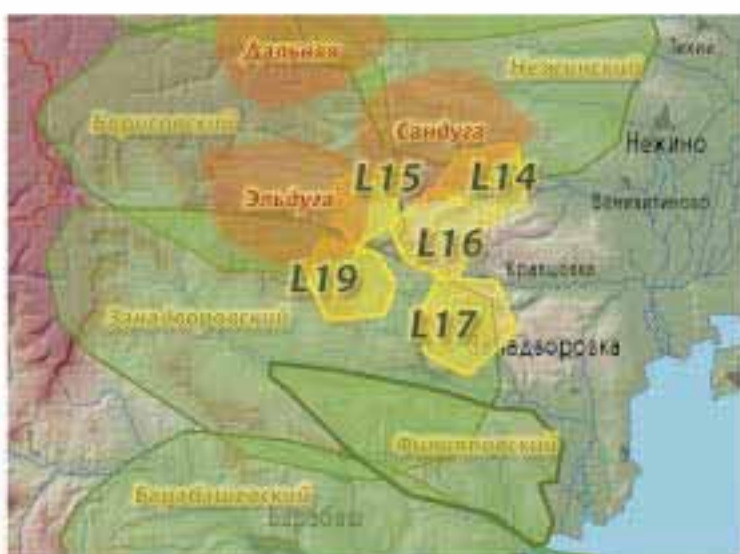
2005年冬、ネジンスキー狩猟区域に設置されたカメラはフル稼働した。いつもと違う兆候が感じられた：ヒョウの頭数を二重にカウントしたか、あるいは誰かがヒョウをけしかけ、過去のデータと見劣りしない数を、記録しようとしたかのようなだった。科学者たちは、一刻を惜しんでフィルムを取り出し、画像を精査した。

新たに5頭が発見された。しかし、撮影した地点からはヒョウの行動パターンを知る材料を得られなかった。5頭はまるで未知の場所から同時にパラパラと現れ、宝物を探してあちこち物色しているように見えた。



2005年にカメラが捉えた新参者のうち、2006年にも撮影されたヒョウは一頭もいなかった。どこからともなく現われ、どこへともなく去って行った。代わりに別の4頭が現れた。

悲しい推測をしなければならない根拠は何もない。彼らは恐らくなわばりを探している若いヒョウで、十分な広さがないと判断し、他に定住地を求めて去っていったのだろう。ヒョウたちがどこから来てどこへ去ったか不明ではあるが、いつか再会できることを願って止まない。



УБЕРЕЧЬ КАЖДОГО ИЗ ОСТАВШИХСЯ



Сухореченский



УБЕРЕЧЬ КАЖДОГО ИЗ ОСТАВШИХСЯ



フィリポヴスキー

ФИЛИППОВСКИЙ



フィリポヴスキーは2年前、5頭の放浪者と一緒に我々の前に現れたが、まもなく姿を消してしまった。

初期の写真はどれも、アンバ川に面した絶壁に設置したカメラで撮られている。しかしフィリポヴスキーがこの地で歓迎されることはなかった。ここはザナドヴォロフスキーのなわばりで、他のいかなるヒョウの訪問も受けつけなかったのだ。

そのためフィリポヴスキーは、ペスチャヌイ半島に定住の地を求めた。しかしそこには、バラバシェフスキーが定期的に入出入りしており、この名優が両腕広げて若いヒョウを迎えることはなかった。フィリポヴスキーも森にすむ権利を主張して粘り強く戦い、その様子は隠しカメラで何度も撮影されている。

幸運を祈らずにはいられない。フィリポヴスキーの生存には、本当に運が必要だ。

まずフィリポヴスキーは、沿海地方の南西部にある密猟でとりわけ有名な村、フィリポヴカの付近でくらしている。猟銃で撃たれたり、密猟者の罠に捕まる大きな危険にさらされている。

仮にすべての弾丸と罠をかわし、ザナドヴォロフスキーやバラバシェフスキーの攻撃をやり過ごせたとしても、メスを巡る不運が追い討ちをかける。フィリポヴスキーのテリトリー付近にはメスが1頭もないのだ。

УБЕРЕЧЬ КАЖДОГО ИЗ ОСТАВШИХСЯ

Тихая



Тийкайя

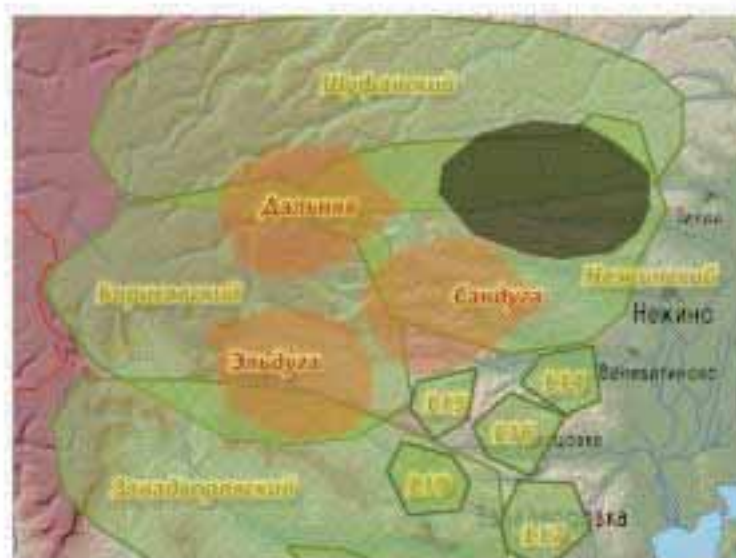
Тийкайяがなわばりとして選んだのは、最も危険で保護も手薄な場所だ。道路や村落に近く、人間に出くわす危険が常に伴う。住民たちも、ヒョウの現状をあまり理解していない。

Тийкайяに会ったのは2005年、今からわずか2年前だ。その時はカメラ調査での確認ができず、Тийкайяがどんな生活を送っているのかほとんど何もわからなかった。それでもいくつか手がかりはあった。2004年、Тийкайяのなわばりを調査中、雪上に母親と子ども2頭の足跡を見つけたのだ。Тийкайяが何とか未来の世代を残したとみて間違いないだろう。

Тийкайяが密猟者に射殺されたことは、明らかだ。しかし法廷では何も証明することができない。ヒョウの密猟で刑事処分となったハンターが、服役した例は過去10年でたった一件しかない。このハンターは、絶滅の危機される動物を射殺し、しかも、国立自然保護区の真ん中で発砲するという二重の罪を犯した。そのうえ、怪我から回復したばかりで檻に入っているヒョウを撃つという過失があってようやく、懲役刑にこぎつけた。ヒョウを撃ったという理由だけで法廷に持ち込まれたその他のケースでは、容疑者は若干の恐怖を味わうだけで、過去も現在も、罪を免れ続けている。

Тийкайяは他のメスと違い、生まれたばかりの子どもを育てるのに必要な、人間が近付けない崖や深い洞穴、立ち入りできない場所が少ないなわばりで生息していた。

心配なのは、Тийкайяの死で空白になった場所に別のメスがすみついたとしても、そのメスが長く幸せに暮らすことはできないだろうということだ。そのメスと子どもらが専門家の観察下で保護されない限り。



УБЕРЕЧЬ КАЖДОГО ИЗ ОСТАВШИХСЯ

Дальняя



Дальняя

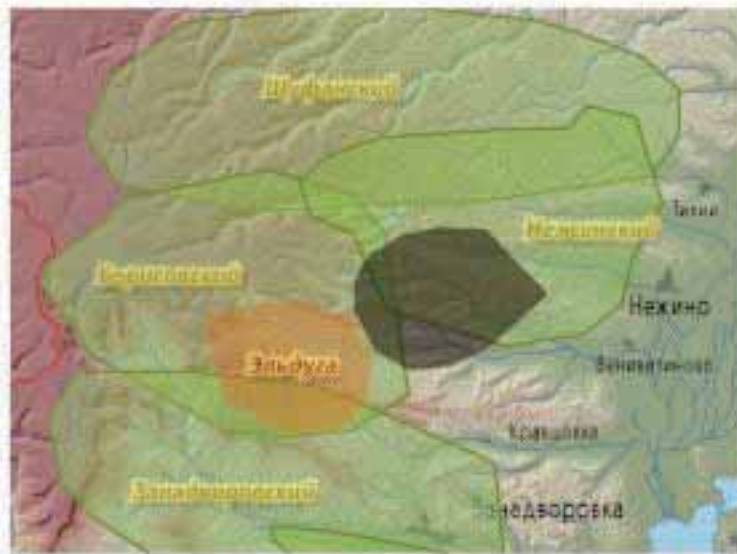


我々がダルーニャのことを知って3年で、行方がわからなくなった。理由は推測するしかない。ダルーニャの行動は、別のメスヒョウに比べ不明な点が多い。

カメラ調査では、一度シャッターが下りると、センサーの準備が整い次の写真を撮れるようになるまで、少なくとも20秒かかる。子連れのヒョウなど、複数のヒョウがやって来ると、最初の一頭、多くの場合母親しかファインダーに入らない。子どもや若いヒョウは、カメラの準備が整う前に、通り過ぎてしまうのだ。

つまりカメラ調査は、母親と一緒にいる子どもの情報を得るには不向きな方法だ。ダルーニャに子どもがいるかどうか、何頭いるかもわからない。しかし我々は子どもがいる可能性は高いと、望みを持っている。特にこの区域での求婚者の数を考えると、期待は高まる。

УБЕРЕЧЬ КАЖДОГО ИЗ ОСТАВШИХСЯ



しかし統計は、サンドウガの将来をはっきりと予告している。カメラ調査の長年の経験では、ひと冬カメラに写らなかった動物が、次の年また現れたという例はかつてない。今回も、同じ結末に終わるだろう。

УБЕРЕЧЬ КАЖДОГО ИЗ ОСТАВШИХСЯ

Эльдуга



エルドゥガ



カメラ調査を実施している北部地域に生存している唯一のメスが、エルドゥガだ。エルドゥガ1頭に対し、自分のなわばりを既に持っている大人のオス4頭と、なわばりのまだ定まらない新参者が3頭生息している。

一見、夢のような生活に思えるかもしれない。何しろパートナーを今日はこちら、明日はあちらと好きなように選べる。誰と決める必要もなく、求愛者たちの注意を一身に集めることができるのだ。しかしヒョウ社会の現実とは、人間のそれとは大きく異なる。多くのオスがいてもメスヒョウにありがたいことはなく、むしろ逆に途方もない悲劇を生む。



1頭のオスヒョウに対し、メスが数頭いるのが本来の姿だ。その場合オスは、常になわばりを走り回り、メスの顔色を伺い注意を払う。これが1年中続く。なぜならアムールヒョウには定まった交尾の季節はなく、メスはいつでも交尾できるからだ。ただし通常、子どもが成長し自立に十分な体力をつけたと判断しないうちは、母親は交尾の準備が整わない。そのためオスは、小さな仔連れのメスにまとわりつくことはない。近寄っても、メスの狩りを邪魔する厄介者になるだけだ。自分自身と同じほどの体格で、自力で狩りができるほど成長した仔を連れたメスを、オスは常に探している。それは、母親が間もなくまた交尾できるようになることを示すサインなのだ。

しかしメスが既に狭いなわばりを持ち、子どものための獲物をその中で充分に取れる場合、話は全く違って来る。メスは突然、争わなくてはならない数頭のオスに遭遇し、なわばりからあまり遠出したり、子どもから長い間離れたりできなくなる。オスたちはどれも、交尾のタイミングを狙ってメスの近くにしようとして周りをうろつき、メスの食料となるはずのノロジカやアクシスジカを捕らえてしまう。生き残った獲物たちも、オスのせいでメスのなわばりから逃げ出してしまう。このように、引く手あまたゆえの喜びどころか、一頭のメスとその子どもたちは、多くの問題に直面するだけなのだ。



УБЕРЕЧЬ КАЖДОГО ИЗ ОСТАВШИХСЯ



Скрытая



スカリトナヤ



アルテム・スコロデルフはある長い冬の夜、南部地域調査チームの本部であるWWFビクターセンターで、著名な動物写真家ユーリ・シグネヴの写真集をながめていた。カメラ調査の写真は、動物の個体を特定するのに役立つ以上の物ではなく、ユーリの写真集には到底太刀打ちできないと思いながら。

ヒョウの毛皮の黒いバラ状斑点を何年も観察してきたアルテムの熟練した目は、突然見覚えのある模様に吸い寄せられた。ノートを広げ、写真資料を調べたアルテムの推測どおりだった。資料に見覚えのある顔が写っている。このヒョウは、2003年に保護区内で撮られた大人のメスとしてデータベースに登録されていた。一方ユーリの写真には、1994年に木のうろから撮影された1頭の子どもヒョウが写っている。無線付き首輪をつけたメスヒョウ、スベトラナの子どもだ。

また別の冬の夜、チーム「ゾブ・タイギ（ロシア語で、「森の声」の意）は、もうひとりの写真家アナトリー・ペロフが撮った、新雪の中の母親と子ども1頭の写真に見入っていた。斑点の模様が一致した。アナトリーの、写真家の目は確かだった。ユーリが撮った子どもは2003年にカメラ調査で確認されたメスで、かつ2004年にアナトリーが撮った母親ヒョウと同じヒョウだった。韓国の撮影隊が2001年から2002年にかけて撮ったビデオ資料で、この事実が裏付けられた。そして子どもがいることも判明したのである。

スカリトナヤは、1994年に生まれたメスヒョウだ。母親はスベトラナで、当時は保護区内を流れるケドロバヤ川流域の女王だった。スカリトナヤは母親のなわばりを奪い、2000年までに最初の子を生んだ。後に、少なくともさらに2度出産したことが写真からわかった。子どもたちの父親もわかった。おなじみのヒーロー、バラバシェフスキである。

最も多く撮影された2004年、スカリトナヤは10歳になっていた。しかし2005年になり、スカリトナヤはアナトリーの撮影地域に現れなくなる。2006年には、保護区内から完全に姿を消した。願いかなわず、スカリトナヤの美しい斑点模様には再会することは、ついになかった。

スカリトナヤを再び見ることはもうないだろうという現実を、今は受け入れるしかない。しかし、野生のヒョウとしてはスカリトナヤは、かなり長生きしたといえる。少なくとも3回出産し、子どもたちの何頭かは立派に成長した。

ケドロバヤ・パジ国立自然保護区があったからこそだ。狭い保護区ではあるが、母親1頭の10年間の生活を支えたのだから。保護区以外の場所で、メスヒョウがこれほど長生きするのは不可能だ。



УБЕРЕЧЬ КАЖДОГО ИЗ ОСТАВШИХСЯ

Нарва



ナルバ



2006年、カメラ調査対象地域の南部に生息するメスは、ついに1頭になってしまった。それがナルバだ。ナルバは、ケドロバヤ・パジ国立自然保護区と一部重複した、恵まれたなわばりで暮らしている。近付き難い崖や洞穴、落石も多く、子どもを育てるには理想的だ。ただし狩りをするには、沼地の多い低地草原まで出て行かなくてはならない。低地にある沼沢地の草原は一般的に、アムールヒョウの典型的な生息地ではない。しかし雪上に残された足跡から判断してナルバは、甜菜のやぶにひそみ、ノロジカに忍び寄る術をうまく習得したようだ。さらに嬉しいことに、やぶの付近で子どもの足跡が見つかった。ナルバがもたらしてくれる野性アムールヒョウの未来に、我々は大きな期待を寄せている。

УБЕРЕЧЬ КАЖДОГО ИЗ ОСТАВШИХСЯ



WWF「ヒョウの森」回復・保護プログラムについて

極東の町、ウラジオストクの西に位置する、1万7,900ヘクタールの面積を持つ「ケドロバヤ・パジ国立自然保護区」は、ラズドルナヤ川と中国および北朝鮮の国境に囲まれた、約50万ヘクタール（東京都の約2.3倍）の温帯林の一部で、1916年に当時のソビエト連邦政府により設立されました。

しかし、現在の保護区は面積があまりにも狭いため、一帯に広がる本来の森林生態系を保全し、失われた周辺の森を回復させることができません。1994年にロシアで活動を始めたWWFは、このケドロバヤ・パジ自然保護区を含む合計約18万8,000ヘクタールを、「Land of the Leopard（仮称：ヒョウの森国立公園）」に指定することを政府に提案、この保護区の設立を足がかりに、将来的には50万ヘクタールまで保護区域を拡大することを目指しています。2005年からは、「「ヒョウの森」回復・保護プログラム」を正式に立ち上げ、様々な立場の人と協力しながら「ヒョウの森」やその周辺の地域で自然保護活動を実施しています。

1. 希少な野生生物の生息数調査と必要なすみかの保全計画を立てる
自然の環境で食物連鎖の頂点に位置する生物の数は、森林の豊かさ、それを食料とする生物の豊かさを象徴しています。沿海地方の森林では、シベリアトラ（アムールトラ）とアムールヒョウがそうした生物の代表格。トラやヒョウの生息数調査を実施し、自然の繁殖に十分な生息数の確保に必要な森林区域の特定、土地利用計画案の検討などを行い、政府に対し提案しています。

2. 森林火災減少への取り組み
沿海地方の南西部では、毎年起きている森林火災が深刻な問題になっています。人為的な火災は、畑や道路の付近で頻繁に発生しており、自然林への影響も出ています。
WWFは、火災が広範囲の自然林に延焼することを食い止めるため、約10メートル幅のカラマツ防火林を300キロにわたり植林する計画を立てました。これは、カラマツを密生して植林することで、樹冠に覆われて暗く湿った下草の

2007年調査で生存の確認された、アムールヒョウのなわばり
少ない環境を作り、同時に厚く積もった落葉による保湿機能を利用し、火が森林内部に入り込むのを防ぐというもので、日本の企業のサポートも受け、2007年から防火林のための苗の生育や植林が始まっています。

森への火入れ取り締まりにも協力しています。地域によって、乾燥した時期には火入れが法律で制限されますが、なかなか徹底できません。そうした違法な火入れを取り締まり、火災が森の深くにまで延焼しないよう、木材関連企業と連携して消防隊を組織する、キャンペーンによる火災防止を普及するなどの活動を実施しています。

3. 密猟や違法伐採の取り締まり
ロシアでは今も、法律で伐採が制限されている木が、違法に伐採され、高価な値段で取引されています。また、森の奥地にまで延びた道路は、密猟者の通路となり、野生生物の密猟も引き起こしています。WWFは、沿海地方の森で密猟や違法伐採を取り締まるグループ「レオパード」の支援を行ない、アムールヒョウや、その食物となる草食動物の密猟の取り締まりに取り組んでいます。同時に地元の猟友会と協力し、草食動物の生息数確保の活動も実施しています。また、国境警備担当者をトレーニングし、できるだけ多くの違法な罠を取り除くよう取り組んでいます。同時にそうした担当者を対象に、環境保全への貢献を競うコンテストを実施、現場の担当者の大きな動機付けになっています。

4. 自然保護用地の取得と管理
活動を支援している地元のロシア企業とともに、国立公園予定地の周囲にある合計約数万ヘクタールのモンゴリナラ林を「自然保護用地」として買い取る計画を立てています。この自然保護用地では、違法伐採や人為的な火災が原因で、荒廃した森林の中で増えすぎたモンゴリナラを伐採し、自然の針広混交林で生育する樹種の成長を促進し、野生生物の生息にも適した、本来の多様な森林景観の保全と回復を図ります。
地域住民が生活の手段を確保することは、密猟や違法伐採の減少につながります。森林の管理が地元の経済活動にうまくつながるよう、産出される木炭などの林産物の市場開拓をサポートしていきます。

5. 普及活動
野生生物保護に対する関心や知識が浅く、密猟や違法伐採に手を染めたり、森林火災を引き起こしたりしている地域住民への啓蒙活動の一環として、ケドロバヤ・パジ国立自然保護区の玄関口の地点に、2006年4月、ビジターセンターを開館しました。地域の学校で、ヒョウの置かれている現状を伝え、人間と敵対するのではなく、ヒョウを保護しながら共存していくことを普及しています。さらに子どもたちは、家庭や地域社会でそのメッセージを伝えていきます。各地で実施される「ヒョウフェスティバル」、「ヒョウの絵コンテスト」など様々な催しや活動を通じ、ヒョウ保護の必要性は住民にも理解されるようになってきました。

この冊子は、WWFロシアで出版した資料をWWFジャパンが編集、加筆して作成されました。
この冊子は無料でダウンロードいただけます。
この冊子の全文あるいは部分的な複写をする場合は、WWFの名前を明記願います。
冊子作成にあたり、英語版の翻訳にご協力いただいた高山顕子様、山田さつき様に深く御礼申し上げます。